

I. 2. 平成28年度 年次報告会におけるアドバイザーによる講評

年次報告会

(1) 平成28年度アドバイザー一覧

(2) 年次報告会 平成29年1月20日(金)

この資料は年次報告会において、各アドバイザーの先生方がお話いただいた講評を取りまとめたもので、アドバイザーの先生方のご了解を得て掲載しているものです。

大きな観点からの講評もあれば、実践的な観点からの講評もありますが、いずれも知財マインドを持ち、創造力・実践力・活用力を育む人材育成の実践に有用なものです。

学校が所属する学校区分の講評だけでなく、他の学校区分の講評も役立つと思われるので、是非ご覧になっていただければ幸いです。

(1) 平成28年度アドバイザー一覧

項番	所 属	職 名	氏 名
1	愛媛県立新居浜工業高等学校	校長	内藤 善文 氏
2	鹿児島県立奄美高等学校	校長	満丸 浩 氏
3	北海道札幌工業高等学校	教頭	新山 雄士 氏
4	北海道滝川工業高等学校	教諭	新居 拓司 氏
5	福岡県立福岡工業高等学校	指導教諭	木戸 健二 氏
6	佐賀県立有田工業高等学校 全日制	教諭	吉永 伸裕 氏
7	兵庫県立西脇工業高等学校	教諭	吉田 道広 氏
8	桐生市立商業高等学校	教諭	諸星 尚紀 氏
9	岐阜県立岐阜商業高等学校	教諭	後藤 有喜 氏
10	岐阜県立大垣養老高等学校	教諭	中野 輝良 氏
11	宮城県農業高校	教諭	渡部 剛実 氏
12	大阪府立農芸高等学校	教諭	烏谷 直宏 氏
13	宮城県水産高等学校	教諭	油谷 弘毅 氏
14	愛媛県立宇和島水産高等学校	教諭	鈴木 康夫 氏
15	独立行政法人国立高等専門学校機構 沼津工業高等専門学校	教授	大津 孝佳 氏

(2) 工業高等学校パート

アドバイザー（6名）

愛媛県立新居浜工業高等学校	校長	内藤 善文 氏
鹿児島県立奄美高等学校	校長	満丸 浩 氏
北海道札幌工業高等学校	教頭	新山 雄士 氏
北海道滝川工業高等学校	教諭	新居 拓司 氏
兵庫県立西脇工業高等学校	教諭	吉田 道広 氏
佐賀県立有田工業高等学校	教諭	吉永 伸裕 氏

2-1) 内藤 善文氏の講評

まず一つブレてはいけないことを確認しておきたいと思います。私たちは教育者でありますので、教育をするということが大前提で、忘れてはならないことですので、再度確認をしておきたいと思います。そしてもう一つ、特許庁様や INPIT 様は、私たちの支援をしてくださっており「学習支援」という言葉を使っています。そこを区別していますので、よろしくお願ひします。

工業の先生がお集まりですので、工業高校では工業高校ならではの知財教育があると思います。農業や商業などと交流をして非常に刺激になると思います。ただ真似をすることは大事なのですが、クッキーを作って終わりということでは工業高校の知財教育にはならないと考えていますので、そのの所は一步進んで先をいってほしいと思います。

先ほど分科会でもありましたが、企業が求める知財人材とは何かということ現場の企業の方に聞くと、「研究者を求めているのではない」、とか、「弁理士を求めているのではない」ということだったようです。企業が求める人材はやはり発想力が豊かであるとか、頭が柔らかいとか、良い考えが浮かんだら試してみる、そういうことができる人材を工業高校の生徒には求めているということですので、私たちもしっかり認識しながら教育を進めるべきだなと感じました。

また、教材の話が出ましたが、身の回りにはたくさん教材があります。例えば私の履いているミズノのシューズ、この中には波板が入っています。私たちは昔から波板は見えていますよね。一方向には曲がるけど反対方向には曲がりにくいと、当たり前のように知っているのに、それを切り取って靴の裏にいれると捻挫しにくくなるというのを誰が考えたでしょう。これを思いついて権利化し、商品化したこの靴は今ものすごく売れているそうです。こういう発想は工業高校の生徒でもできると思います。知財はとっつきにくい、私たちには無理だと言う先生もおられますが、非常に身近な存在だということをお話してみてください。また、その時に「知財教

育はいつするのか、そんな時間ない」と言われたとき、こぼれんばかりに水が入ったコップを例にして、「確かにこれ以上水を加えることはできないけれど、インクを一滴垂らすと、水の色が変わりますよね。これが知財教育ですよ」と言ってください。これは既存の教育カリキュラムの中で、例えば「工業技術基礎」の授業でも知財を増やすとか、歴史を学ぶ中で、産業革命のところで発明について出てきますので地歴の先生に講義をしてもらうとか、数学でも数学の手法を利用してGPSは三角関数を使っているとか、あらゆる教科で発明に結びつきますので、あらゆる分野で横断的に教育ができるという意味で水の色を変えるという言い方ができます。

今後は、更に一步進んで『水を少し抜き取って知財の水を入れる！』くらいのつもりでやらないといけないと思っています。何が言いたいかというと、既にいろいろな学校設定科目を各学校で実施されていると思います。そこで、1単位で構いませんから「知的財産」というような科目を創設してほしいわけです。そういう時代になってきたと思いますので、頑張してほしいと思います。

最後になりますがキーワードは「地域創生」、「地域活性化」で、これと切り離すことはできないと思いますし、何度も出てくるとは思います、アクティブ・ラーニングも切り離すことはできないと思います。

また評価についてですが、子どもたちに創造をさせて評価をどうするかということがありますが、ポートフォリオという評価方法もありますので、是非とも先生方に研究してほしいと思います。アイデア紙コップ創作の話が先ほど出ましたが、そういったものを加工・創作させて、私たちが評価する時に、レベルが高いのか低いのか分からないことも多いと思います。その時には、例えば決められた時間内にたくさんアイデアを書かせて、書けた数で評価する、つまり、量で評価することも出来るのではないかと考えております。

最後の最後ですが、アメリカでずいぶん昔に始まって今日本に輸入されてきている「プロジェクト学習」というものがあります。これはまたご自身で調べてみて下さい。課題を見つけてグループで力を合わせて解決していくという学習方法なのです。評価についてもきちんとしたものが出ておりますので、これから話題になってくるのではないかと思いますので何かの参考になればと思います。今日は長い時間本当にお疲れ様でした。失礼します。

2-2) 満丸 浩氏の講評

今年8年ぶりに加治木工業高校に赴任しました。知財学習についてはどうなっているか心配でしたが、なんとか継続していました。平成13年に取組をスタートして以来、どうやったら継続できるかを検討し、教育課程に位置づけるとか、委員会をつくるとか、継続するための仕組みづくりに取り組んできたことが良かったのだと思います。このことは、知的財産学習を一般化することにほかなりません。九州内の校長会や先生方、生徒からも知財学習という言葉が普通に出てきますので知的財産学習が特別ではないものになっていると感じています。また、本校では知財学習が根付いていると実感した出来事がありました。夏休みに行われた地域別交

流・研究協議会で実施した、紙コップ製作の模擬授業に関してです。模擬授業は、本事業アドバイザーの有田工業高校の吉永先生から指導案が提供されました。その指導案を本校の4人の先生方が7月の授業で先行実施し、改善点や生徒の反応まで報告してくれました。校内に根付いているなど実感した出来事でした。

次に、2学期の全体朝礼の時に、「テレビはなぜ映るのか」という事例と使って特許の大切さを知ってもらえるような話をしました。本校には、なんとなく工業高校に入学してくる生徒が約30%いますが、この生徒に知財学習を通して工業高校って面白いと言わせてみたかったからです。そして、欠席が多い生徒や退学する生徒を減らすことにつなげたいと考えたからです。今後も知財学習を通して、全教員が一丸となって、「工業高校って面白い」と笑顔があふれる学校にしたいと考えています。このことは、入学してきたばかりの一年生から展開することは大事だと考えています。

最後に、本日は自校以外の年間報告を聞く機会でもあり、自分のものさしの中にある話もたくさん聞いたことと思います。全く未知の世界を見ること、知ることによって得られるものは非常に大きいと思います。是非そのような機会を少しでも多く経験して、今後もたくさん「面白い」を感じていただければ、きっと知財学習を通して教育は豊かになるものと思います。

2-3) 新山 雄士氏の講評

まず自慢話になりますが、日産自動車がNOTE e-POWERを発売しました。実は2005年に生徒と一緒に、ひまわりの油を使ってディーゼルエンジンで発電してモーターを回すカートを作っていました。これを作っていた生徒からメールが来まして「やっと時代が追いついてきたね」というようなことが年末にありました。

さて今回は、AグループとCグループに参加させていただきました。空いている時間に先生方から提出いただいた資料を全部読みましてまとめさせていただきました。まず、Goal(目的)が一番大切だと思います。今日私のまとめはこれだけです。あと、成果そして課題をそれぞれの学校で今一度意識してまとめていただきたい。(スライドに映して)これがC班です。課題は提出していただいた資料から抽出しました。もっと目標を大切にしないとイケません。これから新学習指導要領がはじまりますので、ちょっと大変になるかなと思います。それぞれの学校に教育目標があると思いますが、言えますか。日頃からきちんと学校教育目標を理解して教育活動していますか。新しい学習指導要領では、地域に開かれた教育という、地域にきちんと説明できるかということだと思います。ですからGoalを目指して日々何をするのか、日々の取組がその目的に合っているのかどうか考えるために必ずGoalが必要だと思います。

もう一つは評価です。Aグループでも出ていましたが、どうやって評価したら良いのでしょうか。特許取ったから『10』で、テストの点数が悪いから『1』で良いのか。学校も教育目標がありますし、その教科の教育目標もあると思いますし、個人の目標もあると思います。その目標にどれだけ達成できたかを評価をしてあげなければなりません。ですから本校、札幌工業高校でも目標を立てました。しかし、目標に到達できませんでした。何%到達したのかを今考えて

もらっています。そうすると本校の取り組みが今年度何%だったのか、来年度の目標をどうしようか、という話になると思います。そして目標は毎日でもいいです。一年に一回でもいいです。進化させるべきです。(スライドに映して)これは何かといいますと老舗といわれるお店での世代交代をTVでやっていました。新しいものにチャレンジしなければ老舗を守れない。今までと同じことをやっていると、学校の学習も同じだと思いました。トヨタ自動車の話ですが、現社長がより良い車を作るという目標を作りました。「より良い」とつけると何になるか、限りがないということ、永遠に目標が続くのです。だから妥協がなくなっただけです。ですから Goal (目標) を設定することは非常に重要だということを再認識していただきたいと思います。

それから、先生方の報告にもありましたが、どうやって仲間を増やすか。楽しそうに、一生懸命やる生徒を見せたら先生方も変わるといいますので、そのような啓発にも力を入れていただければと思います。人に頼らず自分でやってみる。これがとても大切なのです。「人が動かないからやめた。」ではダメなのです。先生方は、一生懸命取り組んでますので、ぜひその輪を広げていただきたいと思います。

毎年お知らせしていますが、レジュメの裏面をご覧ください。Top100 グローバル・イノベーターズが今年も発表されました。昨年は日本の企業が、トップ 100 に 40 社入っていたのが、今年 34 社です。減ったと思うのですが、先ほど INPIT から報告がありましたが、量より質に転換しています。そして長崎工業の先生から報告がありましたが、中国の特許の出願件数が増えています。ただ、中国の特許は日本とはちょっと違いますので、詳しくは鳥居人材開発統括監から聞いていただければと思います。

もう一つ余談ですが、今までトムソン・ロイターでやっていたのですが、事業売却で資金を調達するために Clarivate Analytics という会社に譲渡され事業は継続をされています。6年連続が 14 社、工業高校ではご存知のルネサス・エレクトロニクスが初めて入っています。そしてキャノン、日立は医療関係、グーグルは自動運転、それからアマゾンにはドローンのような無人機の技術についての特許が多いです。ですからこのような特許の動向もぜひ生徒のみなさんに教えていただけたらと思います。

先生方苦しいと思いますが、先生方が楽しくないと生徒も楽しくありません。苦しいのを楽しんでいただけたらと思います。今日は私も大変勉強させていただきました。それぞれの学校に戻って頑張っていただけたらと思います。本日はありがとうございました。

2-4) 新居 拓司氏の講評

知財教育を行っていて何が大変かということ、周りの先生方の協力が得られない、いかにして仲間を見つけるか、という所で非常に困難でした。その時に自分が何をやったかを振り返って、B班ではお話をしましたが、やはり仲間を作るために生徒の姿を見せたり、先生方にも生徒と同じことを体験してもらおうということで簡単な紙タワーを作ってもらったりすることで、「楽し

いかも」と体験していただくことで、その体験から知財というものが奥深いものであって、別に敷居の高いものではないよと認識してもらったことがありましたので、もし学校のほうで孤立して、一人苦しんでいる先生がおられましたら、校内研修で知財に関してやってみたいと提案されてみると少し仲間が増えるかもしれません。

あとは生徒にもものづくりをさせていく中で失敗が多くあるかと思いますが、失敗させてなんぼという所もありますので、失敗を恐れていると新しいものは絶対に出来ません。いい発想も出てきませんので。失敗したらどこかが間違っていますし、不具合があるのだなど。ではどうやって不具合をなおすかというところで、みんなで協力して考える。そういうことをやっていくうちに、知財と工業のものづくりを組み合わせればすでにアクティブラーニングをやっているようなものですから、先生方自信を持って教壇にも立っていただいて、生徒と楽しく知財を進めていただければと思います。

2-5) 吉田 道広氏の講評

今日E班ではパテントコンテストという言葉がよく出てきていました。その部分を少し掘り下げてお話したいと思います。私どもの学校もパテントコンテストに応募していますが、どの先生も苦勞されると思います。なぜ苦勞するのかといたら、やはり目標だと思います。生徒がこんなものをつくりたいという目標です。その目標があやふやだと感じています。漠然と何かつくってよというのではなく、「こんなものに最後ならないかな」と先生方が少し考える方向付けすることによってもっと方向の広がった良いものになるのではないかと思います。

考える時に、生徒がよく言うのが「もうダメ」といったことです。でもそう思う前に、もう一回考え直す、これの繰り返しだと思います。その繰り返しを生徒にどう伝えるかです。言葉で言ったら生徒もついつい嫌になって感情的になりますので、必ず文章にします。文章にすると大事なものと読み解きます。結局は作っては失敗の繰り返しになるのですが、生徒はその過程が大切です。最後できたとき、失敗してもできたときの喜びが必ずかえってくると思うのですね。その部分を大事にすれはうまくいくと思います。絶対にしてほしいのは先生方が諦めないで、目標を設定して生徒たちにうまくヒントを与えるようにするとうまくいくと思います。自分たちが思ったアイデアを一年間かけて積み重ねていくことが大事だと思います。

また、課題研究についてですが、研究内容を新たな知財に結ぶ付けることは大変なことでbす。課題の一部を取りあけて、少し発想を変えていただいて、大掛かりに考えるだけではなく、小さなものへと考えていければうまくいくとこともあります。そのためにも、特に一年生の段階からどんな発想を学習するか、その基礎築くための状況に適したアドバイスをうまくやっていただけたらと思います。

2-6) 吉永 伸裕氏の講評

うちの班は地域にもとづいた実践事例が多かったと思いました。私の話ではアクティブラーニングに焦点を絞りたいと思います。今よく言われるのが、グローバル化が云々かんぬんという言い回しですが、その時に注目すべきは地域なのではないかと思います。

(スライドに映して)この黄色い部分が地域だとします。外に向かって目を向けないとダメだと言われていますが、外のことを意識するということは何かというと、自分たちの足元を見ることなのだと思うのです。では自分たちの足元が何かというと、地域もそうですし、専門で持っている知識や身につける技術というのが当てはまると思います。ではこの三つのものが何を持っているかということ、地域ごとの特性、知識ごとの特性、強み弱みを持っているはずで、これはいろいろな分析の仕方が出てくるし、住んでいる、暮らしている皆さんが一番良く分かるはずだし、生徒たちもよく知っているはずで、ただしそれに気付かないのも地元の人ほど多いと言いますから、外が目線から端的に気付いたりすることがあるのだと思います。すごいこと勉強しているのだとなかなか気付いてくれないこともあります。その価値がどこにあるのかを気付かないといけないのです。このようなことがしっかりとできている人たち、学校、先生、生徒たちがやっている実践というのはとてもきちんとした取組みになっていると思います。単純に、これをやっているという上っ面の実践をやっているところは何かが違うなという感覚があります。

やはり自分たちが持っている、地元が持っている力をよく分かっている人たちは逆に外に向けてどこが違うのだ、だからこれはうちの強みなのだと。例えば、海のない岐阜は海が無いことを強みにできるのだと、商業において工業、水産で持っている知識や技術はこういう風に役に立つのだということ分かっている実践とにはいつも「おっ」と思います。

今日は彦根工業の実践が個人的に興味深かったです。一番災害にピンと来ない、津波も琵琶湖には来ないので、でもだからこそ災害に対しての意識を僕らは持たないといけないという建築・土木系の先生の発表でした。そういう発想が自分たちを見つめる方法としてあるのだと、そして災害用の設備を自分たちの土木の技術を使って作っていくというすごい実践だと思いました。このような実践をシステムとしてきちんと作ることができるのが知財だなと、いつもいい事業だと思っています。ただ、授業の取組が素晴らしいからみんなでそれを広めましょうという考え方は、この事業の本質ではないのではないかと思います。結局その仕組みを使って実践されているのは先生方で、実際にやってくれているのは生徒さん達なのです。なかなか他の学校の生徒同志は結びつきにくいご時世なので、先生方の交流が一番です。ここにいらっしゃる先生方がみんな仲良くなるとすごくいい繋がりになります。ですからこの事業をそういう風に役立てていただきたいなと思いますし、そのように言うのは私自身がこの事業のいろいろな研修でいろいろな学校の先生にもの見方や実践の有り方を学んだからです。本当にいい

実践を聞かせていただきました。来年もまた、継続したい実践を聞かせてください。

(3) 商業高等学校パート

アドバイザー（2名）

桐生市立商業高等学校 教諭 諸星 尚紀 氏

岐阜県立岐阜商業高等学校 教諭 後藤 有喜 氏

3-1) 諸星 尚紀氏の講評

先生方のご意見を伺った中で考えるのは、先生方が苦勞されているのは、事業を通じていかに知財をきちんと学んでもらえるかという部分とお見受けいたします。あまりこの部分にとらわれ過ぎると、各学校、各先生の独自の個性のあるアイデアを活かした学習ができなくなってしまいます。先生方のやりたいこと、生徒たちのやりたいことを優先して取り組んでいただき、その中で知財学習に関与する部分をうまく取り込んでいくイメージで実施していただき、その中でより興味や関心を持った部分が出てきたときには、更に深く学習していただければ良いと考えます。

また、授業の中では、必ず「評価」をするという難しい局面が出てくると思います。私が知財学習に取り組む教員として、アドバイザーとしてこの評価について考えているのは、どうやったら適正な評価ができるかということです。どこをどのように切り取って評価していくのかは非常に難しく、私自身これという回答はここでは差し上げられません。皆さんにアドバイスいただければと思います。皆さんの取り組み事例やお悩みをこのような意見交換の場でぜひ共有させていただき、それぞれの悩みや苦勞していることの解決の糸口になればと思っております。来年以降もまたよろしく願いいたします。

3-2) 後藤 有喜氏の講評

今日一日、皆さんの学校の現状等を聞かせていただいて感じたのは、皆さん同じ商業高校ということで、持っている悩みや感じていることについて共感できる部分が多いということです。

先程A班のまとめの中で、アウトプットで実社会とつながるということが出てきましたが、我々は商業高校ということで、ものづくりを最初から最後まで完結することはできない以上、外部とのつながりがどうしても必要です。教員の業務はどうしても学校内から外に出ない内向きな性格を持っていますが、知財学習を通じて外とのつながりが増えてきて、意外な方向に展開していい結果となるケースも多く見られました。生徒たちも外部の方々（企業の方々や他校

の生徒) と接することにより、吸収できることは少なくありません。視野が広くなり、成長していく事が目に見えてわかります。この 3 年間、この点を強く感じました。この部分が最大の成果だと思えます。

(4) 農業・水産高等学校パート

アドバイザー（5名）

宮城県農業高等学校	教諭	渡部 剛実 氏
岐阜県立大垣養老高等学校	教諭	中野 輝良 氏
大阪府立農芸高等学校	教諭	烏谷 直宏 氏
宮城県水産高等学校	教諭	油谷 弘毅 氏
愛媛県立宇和島水産高等学校	教諭	鈴木 康夫 氏

4-1) 渡部 剛実氏の講評

先生方の話を聞いて初心に戻った気がしました。

知財を一人で始めたため先生たちの悩みと全く一緒だと感じました。今の自分を支えているのは知財の” お金” です。お金がないと生徒たちをどこにも連れていけないし、試作品を作ることもしない。また、” 生徒の変化”、” 理解を示してくれる人が必ず現れる”。この3点が心の支えとなっています。

生徒をのばして変化が見受けられると自分の意欲にもつながり、そして他の教員も興味を示してくれるので今後も継続していきたいと思っています。

4-2) 中野 輝良氏の講評

先生方が本日、年次報告としてプレゼンされた内容から言葉を拾ってみたいと思います。

学校の中で、「知財を引く（ドン引き）から自然に存在しているもの」にしたいというお話がありました。まさしくその通りで、「知財の取組を特殊な事例」にしてしまったら、どんどん学校の中で浮いた取組になってしまいます。しかし、このような意見があるという事は、逆に各校でご担当された先生方が「かなり見えるかたちまで進んだ実践をされ、かつ校内でその取組が多く先生方から意識されている」ということではないかと思っています。

大切になるのは、着地点はどこにあるのかを見据えること、そして各校が今、どこの状況まで進捗しているのかを把握することです。例えば展開型校の場合ですと、事業は最大3年で終わりますが、「3年後は知財教育の実践校として自立し、地域の知財教育の拠点校として役割を果たせるようになる。」という着地点があります。それに対して、今、自分の学校はどこまで進められているのかを振り返り、把握するのが年次報告会の1つの役割でもあります。

今、校内で知財教育の取組が「浮いた状態になりそう」ということであれば、ある意味、知財

教育が認知され、良いスタートが切れている証拠でもあり、次年度の課題は、ではその切ったスタートをどう定着させ、どう1人でも多くの先生方へ伝えていくか、そのための校内組織の構築はどうか、といったことへつなげていけるはずなのです。できるか、できないかは別として、各校で打ち立てられた着地目標点に向けて、一步でも近づけるよう様に取り組みることが力になります。支援を得ながら、知財教育を始められるスターター、導火線に成り得るのが、この事業なのだろうと思っています。一方、「知財教育がなかなか学校全体に広がらない」というお話や、「指導者の知識不足が顕著化している」といったお話もございました。これは先のお話を越え、さらに取組が一步進んだところでお感じの意見ではないでしょうか。

私自身のお話をしますと、知財教育が私と一部の生徒の活動に見えてしまい、やればやるほど周りの教員に「あれは宗教ですか」と言われたこともありました。この言葉の裏を返すと、先の話と同様で、知財教育が「立派に私と一部の生徒の活動」になっているのです。そこに火種が出来ており、この火種をもとに火を広げていくためにはどうしたら良いか。周りに広げるためにはどこに、どんな落ち葉を、どれだけの量を用意した良いかを考えたのです。これを年度末の区切りには一度まとめて、来年度の課題としてとらえていただき、来年も本事業を継続していただいているならば、年間の指導計画の立て方、予算の組み方に、ステップアップすべき課題が盛り込んでいけると思います。「知財を学んでいる生徒と学んでいない生徒の温度差が大きい」まさに、これは次のステップへのチャンスではないでしょうか。一度に、全ての生徒に火種は当然、広まりません。時間をかけて、少しずつ、広がっていくものです。でかから、この「温度差」が学校の課題としてとらえられている、つまり「知財教育が学校全体のこと」と、とらえられている学校の先生はかなり活動をされている、ということなのです。まさに「レベルの高い悩み」とお考えいただけたらと思います。私は、日頃1つの知財教育に取り組んでいても、あえて違う目線で2つの目標を持っています。一つは子ども(生徒)たちに知財の面白さや知財の大切さを知ってもらうこと。もう一つは、授業で、生徒に、と言いながら、実は他の教員に授業の中身や生徒の姿から知財の指導手法や考え方を知り、感じとってもらうこと。つまり、生徒も知財で育てながら、同時に指導者の拡充も狙っているわけです。教員は最高のエンターテイナーであるべきです。しかし、それは単に楽しい授業をするという程度のものでなく、その楽しく学べる授業の裏側に核となる「学ばせる仕掛け」があって、その学びと面白さを、生徒が主体的に考え、学んでいく中身と環境を提供できる、そんなエンターテイナーであり仕掛けができるプロデューサーであることが重要であるということです。このアドバイザーの任を仰せつかり、一番やりがいを感じることは、「私自身も皆さんと一緒に教育の現場に立ち、授業をし、生徒と向かい合い、そんな教員というひとりの仲間として、こうして色々な実践の話が出来ること」です。全国で学んでいる、そして指導している仲間がいるということ誇りに思い、知財教育でつながるネットワークを大切に、これからも生徒たちの育成に励んでいただければ、本日のメインテーマにである「知財から未来の産業人の育成」につながるのではと思います。

今年も先生方からたくさんの学びをいただいて、私も学校へ帰ります。今日の学びを私の生徒たちにフィードバックすることをお約束し、また先生方の取り組まれる知財教育が今後ますます充実されますことを願い、まとめといたします。

今後とも、お互い知財教育で「未来の産業を背負って立つ生徒を育てていきましょう。」
ありがとうございました。

4-3) 烏谷 直宏氏の講評

知的財産権と知財学習とが、本事業の報告会や本事業の取り組みがなんとなく全部がひとくくりにされて整備されていないため、なかなか理解されにくいところ。知的財産を生み出すためには創造学習が大切であり、すごく知財学習との親和性が高いものであると感じています。私たちが日々農場生産物の栽培管理等に取り組んでいる知識や技術、数値などのデータは知的財産を生み出す活動であり、その先にそれらを保護や活用するための知的財産権がある。それは特別なことではないと思います。日々自分たちが取り組んでいる農場生産物の栽培や飼育等に関する知識とか技術やノウハウは知的財産に繋がるものであることを認識する大切さを、本事業に携わることで構築できました。生徒も教員にも言える事ですが、何事に対しても意識が定着してくると、学ぶ意義とか、その先に何ができるのか、何をすべきか、物事に対してそういう目でしか物事を見ることができなくなります。つまり、それは魅力ある先生や教材、魅力ある農業、魅力ある水産、魅力ある生徒になっていくきっかけであると思います。本事業の大切なポイントではないでしょうか？本校としての立場から申しますと、展開型校の最終年度を迎え、卒業するのではなくて、知財学習を継続して携わっていくことが大事ではないかと考えています。

4-4) 油谷 弘毅氏の講評

今日はとても勉強させていただきました。皆さんのプレゼンで共通している事は、基礎の基礎を大切にされているという点でした。農業系で言えば、生き物を育てる、乳牛を見に行く、水産系で言えば、魚を育てる、食品加工をきちんとするということを積み重ねることにより、新たな視点が得られ、発想に繋がり、知財学習の成功につながると感じました。わたしも、学校に戻り基礎基本を大切にすることを生徒たちに伝えたいと思いました。

当たり前の事だからこそ忘れてしまいそうになる事柄なので、気を引き締めてがんばりたいです。それから、大切なことですが、新しい仲間が増えることにより気づかされることが多い。生徒も教員も同じく仲間が増えることによって、より新しい発想や方法、教え方、創造が生まれます。先生方の報告を拝聴し、仲間になることができました。そして、新しい事を知る経験は大切だとあらためて感じました。

4-5) 鈴木 康夫氏の講評

10校の発表聞かせて頂いてどの学校の取り組みも面白いと感じました。私は、この事業の一番の良さは、生徒同士が交流できたり、先生同士が繋がりを持って情報を共有し合っていけることだと思っています。今後も多くの学校が交流し合ってお互いに助け合えるような関係を築いていければ良いと感じています。」

(5) 高等専門学校パート

アドバイザー（1名）

独立行政法人国立高等専門学校機構 沼津工業高等専門学校 教授 大津 孝佳 氏

5-1) 大津 孝佳氏の講評

「教育という観点では文科省が考えるべきことになるので、この場で話したいのは未来の社会を担う人材の育成という観点である。どうしたらそのような人材を育成することが出来るかということを是非考えてほしい。正解がないからこそ、いろいろな学校の取組みや、いろんな人からいいものを取り入れて頂きたい。いいところをもっと取り入れて、より良いものにして行きたい。その為には高専間の連携も重要である。

この事業への参加校として、新しいところも増え、展開校も増えた。それぞれの学校が特色を生かした知財学習を実施しているので、是非、連携し協力して、人材育成という視点での知財学習を進めて行きたい。更に、重要なこととして、評価をいかにわかりやすく行うかについても、今後取り組んで生きたいと思う。」

以 上